みずひき草

『山茶花』　71-1号

夏畢る光の中いちずなる紅を結びてみずひき揺るる

鍵穴より覗く家内の暗がりに敢へて確かめむみづからの不在

ふたりゐてながき沈黙の夜をもつ互みに語彙の乏しき理解

霜枯るる藤棚の周にはからずも出遇ふ懼れは死者より生者

終の日はガラスの柩に運ばれむひと生の辱ば曝すよりほかなく

霜月の窓　　『山茶花』　71-2号

なべてものただに末枯れし霜月の窓にさしあたり白き贋薔薇

ひさびさに霜月の陽ざし室に充ち机上のものことごとく光りぬ

ステンレスのケトルに滾る湯の音は今宵唯一の自己主張

自在なる流れの中の川に沿ひ還りゆかなむ定型の韻きに

夕映へに犬と寄り添ひ佇つ人の像さみしき孤独と思ひぬ

冬の耳鳴り　『山茶花』　71-3号

夢まくら逝きたる若さに還りきて再びわれを娶るや夫よ

履き馴れぬ沓に疲れて戻る道ゆめゆめ愧は零(こぼ)さじと思ふ

みじろがねば埃も立たぬ冬ま昼自縛の容を畳におとしぬ

耳鳴りのほか物音のなき深夜ひそひそ孤独の育ちゆくらし

身を寄せて聴くは親しきわが耳鳴りこの単調も夜のシンフォーニー

冬の自浄　　『山茶花』　71-4号

馴らされし冬の怠惰の掌のひらにゆらぐ豆腐を賽の目に切る

しみじみと自浄の念ひ溢れむか寡黙に雪は森閑と零る

純白は天が零らすもの汚しゆく怖れを持ちて新雪を踏む

交々の言葉こもりし夕ぐれの電話ボックスにのみ明るき灯の色

すぎゆきはなべて闇なかに束ねられ足袋の鞐は淡き銹もつ

あした葉　『山茶花』　71-5号

存らへる日々われに何為せしとや明日葉を摘む野辺の夕映え

既にして恃む未来はあらずとも夕焼け小焼けをひたすら帰る

沈丁は幼木ながらひたぶるに放つ芳香を窓あけて嗅ぶ

越えて来しひと生の坂の下り道花さながらに萌ゆる草樹々

針の錆ほのか光らせ縫ひ綴じる亡母の古き袷のうら表

待つ春

『山茶花』　71-6号

いちはやく春を見たさに磨きゐる窓のガラスの昏き透明

帰り来て闇に手探ぐる鍵穴にまとひ来し春を先づは挿したり

いちずとは云ひがたけれど春を待つこの希ひいづくにか届かむ

わが微熱たやすく奪ふ春の風昏れながら空はおだしか色持つ

ひと枝に慰められし孤のこころ椿はしっかりと紅を絞りて

射干　　『山茶花』　71-7号

五月風蒔きゆく種子の跳び散りていづくに育つらむ乾きもつ地（つち）

吹く風に毅然と立てるしろき射干問ひたきことのひとつは秘めむ

暗がりにひっそりと遅れ咲く白き射干われには二人の母の追憶

生きの身の寂しさ極はまる春夕べ散り騒がしきどうだんつつじ

亡き魂と夢にも逢はず目覚めたる朝たどたどと山鳩鳴けり

はつ夏　　『山茶花』　71-8号

舞ひ上り舞ひあがりゆく蝶を蒼天(そら)に追いつめてわれのはつ夏

風なくて沈黙ながら立つ樹々の昼の表情は六月のかがやき

散り際の薔薇の花びら掌に享けて崩るるものの纏めやうもなく

どくだみの白き小花に射す月の鋭き光(かげ)は明日のわが糧

訪ねくる人を迎へむと締め直す水玉模様のサロンエプロン

さつき闇　　『山茶花』　71-9号

言葉持たぬひと日の果の夕ぐれは生と死のあはひのごとき冥がり

薄れゆくまなこ試めさるる五月闇とり落せるものの何かは知らず

おろかにも己れ見失ふ五月闇いましみじみと亡母の名を喚ぶ

起き抜けの素足にて踏む庭芝生みづみづと今日を生きたかりし

吹き荒れしひと夜の風に落ちつくす家禽の頭ほどなる青桃

独り言

『山茶花』 71-10号

ほどほどの温情の中に育つらし野良の仔猫はまろく睡れり

育ちゆく少年に似て捥ぎたての胡瓜はほのか青臭きかな

訥弁にくり返しゐる独り言あら草の道に風が攫へり

はしなくも人の訣れに出会ひたり茶房の木椅子に身は冷えながら

自らを出でざることも意志にしてまざまざがんじがらめの自縛

夢　　『山茶花』　71-11号

一族と頒ち合ふ血の愛しさよはばかりもあらぬサルビアの朱

焼きたての麺麭は香ばしく漂よふも孤りの飲食(おんじき)のうらさびし

夏夕べ簾通して風を喚び亡き児に歌ふわが子守唄

もの忘れを愛嬌としておもむろに老いゆく長姉(あね)に母を重ぬる

夢に逢ふ亡母の無言をうけ止めて確にわれは何かを言ひぬ

ルーペの退屈　『山茶花』　71-12号

この夏をいかに越すならむ病む人に風鈴吊るせばかすか頷く

少しづつ呆けゆく長姉を哀しめどときに苛らだちときに諍ふ

人不在卓のルーペの退屈はその円型を捉らへて拡大す

昂ぶりもなきこの日頃の安逸よ萌(もや)しの髭は丹念に切り

総人口六十億のそのひとり深夜ひそかにわがなま久伸